
桜から繋がる奇跡へ

篠 隼鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜から繋がる奇跡へ

【Nコード】

N3071BA

【作者名】

篠 隼鷹

【あらすじ】

来須学園の合格を確認したとき、つい涙があふれた。そんな羽鳥に近づいてきた少女。少女の正体は――？

よく晴れた寒い朝。そろそろ三月だというのにまだまだ春は遠い。桜についたつぼみもまだ小さい。

白い息を大きく吸い込み、吐き出して。緊張で震える手をぐっと握りこむ。

癖のない髪が風に吹かれて揺れた。黒い瞳が掲示された番号を滑って行く。

今日は私立来須学園の合格発表の日だ。この場には羽鳥だけではなく、周りに中学生が群がっている。

掲示される時刻より三十分前に着いたというのに、そこはすでに黒黒黒くろクロ：黒一色。日本人の特徴である黒髪で溢れ返っていた。

この人数の多さで「来須学園」の人氣が窺える。

数百人の受験者の中で己の番号を探すがなかなか見つからない。

羽鳥の受験番号は「83」。83……やみ、「闇」を連想してしまつて、あまり嬉しくない。それどころか、不吉過ぎでこの進学校には受からないのかもしれないと諦めすら感じた。

中学三年生に上がった当時の自分の成績は芳しくなく、偏差値40を少々過ぎたくらいだった。進路調査で第一志望に書き込み、三者面談で担任が出した溜め息は今でもよく覚えている。

「お前、本気か？」といったムードだった。

仕方がないのかもしれない。この高校の偏差値は65。40そこらの羽鳥から見ると高すぎるハードルだった。

そのことは自分が一番よく分かっていた。だが、変えたくはなかった。この高校選んだ理由が不純なものであっても諦めたくはなかった。

友人と遊ぶ時間を減らし、睡眠時間を削り、分からないところがあれば教師に質問して苦手を徹底的に潰していった。

努力、努力、努力努力努力！！ の繰り返し。

その努力は――――

――――実った。

自分の受験番号を発見した瞬間、見間違いかと思って何度か目をこすった。何度も何度も見た夢ではないかと自らの頬をつねれば痛みがある。夢でも幻でもない。本当の自分の番号だ。

塾や予備校のCMで、大学受験に合格した高校生がよく胴上げされて祝福されるが、常に白けた気持ちで見っていた。

それが、今理解できた気がする。想像の中では自分は今胴上げの最中だ。感極まって目頭が熱くなってきた。そのうちぼろぼろと涙が滝のように零れ落ちてきた。

口を半開きにして呆然とする。涙は止まる目途が立たない。その場にいた合格発表を見に来た中学生たちは羽鳥を見て何を思ったのか、本人に聞こえないようにひそひそと話を始めていた。

「そんなに泣いて、どうしたんだい」

少し離れて立っていた中学生――足首まであるコートを着ていて、どこの学校かは分からなかった――が隣に歩み寄って羽鳥の顔を覗き込んだ。

身長は178を少し越えたくらいだろうか。羽鳥より身長が高かったが、顔を見て驚いた。

——女子生徒だった。

確か、来須学園は男子校のはずなのだが……。全体的に色素の薄い塊で、印象はやわらかく、疲れた精神を癒してくれそうなやさしい雰囲気だ。

小顔で、華奢で……。顔はなぜか自宅のまめ柴を彷彿とさせた。

首に少しかかるくらいのショートヘアは顔が丸味を帯びて見える。薄茶の髪は茶柴の色と似ていて、なんとも愛らしい。これでもう少し身長が低くて、声がもう少し高ければ——見た目よりかなりハスキーな声なのだ——、男はいちころだろう。

その女子はなぜか同情したような表情でこちらを見ている。羽鳥には理由が思い当らず、止まらない涙はそのままにして首を軽く傾げた。

「……この学校、結構難しいからね。落ちたのは残念だけど、きつといい経験になるよ」

——「落ちた」？

非常に残念そうに言われた。親と離れ離れになったカモの雛のように、それはそれは極端に寂しそうに涙ぐんで言っている。

言われて周囲を見回してみると、泣いているのは自分一人。そして、気付いた周囲の視線。先程から感じていたこの視線は「かわいそう」なものを見るものだったのだと理解した。

「俺、落ちてないよ。受かったんだ、…………一応」

三年に上がった当初のあの芳しくない成績からくる自信のなさは仕方ないだろう。たった一年でここまで成績が良くなったとは、自分でも奇跡としか言えない。

涙を手で擦ってぬぐい、今度は逆方向に首を傾けて話すと、女子生徒は目を見開いて頬を薄っすら赤く染めた。

「きみ、かわいすぎるよ……」

俯いて表情を隠そうとしているのか、顔を下に向けてもごもごとと呟いた。小声でよく聞き取れなかったのだが、あまりいいことを言っているふうには思えなかった。

「そうか、受かったんだ……。じゃあ、四月が楽しみだね」

そう言ってぐっと近寄ってきた顔に驚く。目の前でにっこりと微笑まれた。可憐な少女の頬笑みをこんな間近で見られるのはそうそうないだろう。

少女はそっと羽鳥の真黒な髪に指を通して、梳いた。数回撫でて離れると、「じゃあね」と言って去って行ってしまった。

少女を見送ると、ふと疑問に思った。

彼女が歩いて行った方向は、学園の敷地内だった。

人生最大の誤算。そんな言葉が似合う初登校。自分のクラスの戸の前で止まる。緊張で手が汗ばむ。心なしか目が潤んでいる気がする。

クラスは親友二人と同じだ。それだけ見れば先行きが明るそうだが、全くそんなことはないのが現実だ。

深呼吸を数回し、両手で頬を叩く。気合を入れて引き戸に手をかけた。

開けた瞬間、黒板の近くで立っていた生徒が振り返った。

「よう、羽鳥！」

羽鳥に向かって手を振る一人の男子生徒。

「クラス分け見たとき、びっくりしたよ」

そしてその隣に立っている男子生徒が振り返る。

小・中と同じ学校に通い、何度かクラスも同じになったことのあ
る二人。

手を上げて呼んだのが坂本環。さかもとたまき縦はかなり大きく、横は筋肉がよく付いたスポーツマンタイプ。顔もそこそこ整っている。

首を傾げて苦笑しているのは宮前光太郎。雪のように白い肌と、見つめられると固まってしまうほど冷たい黒眼。だが、少し跳ねた染めたことのない癖っ毛のおかげか、印象は眼ほどきつくはない。

この二人は中学三年で同じクラスになり、同じ高校へ行こうと誓い合った仲だ。

羽鳥は内心複雑だったのだが――。

二人のもとへ近づいて行く間、緊張で身体が潰されそうな感覚が強くなった気がする。

「俺もびっくりした。なんで俺、一組なんだよ……」

教室に入る前――入った後もまだ続いている極度の緊張はこれが起因だ。学生玄関の前に掲示されていたクラス分けを見て驚愕し

た。一組だったのだ。

この高校はクラスの組が若いほど頭の出来がいいのだ。中学三年当初の偏差値は、担任の教師に嘆かれたくらい悪かったのだ。それが一組に入るまで入試で点数を稼ぐとは。

「……信じらんねえよ……」

既に潤んでいた目の端から涙が落ちそうだ。きっと点数はこのクラスで一番悪いのだろうが、何の因果か一組だ。最低点だとしても、一組なのだ。がっくりと肩を落として溜め息が出た。

……これからの授業について行けるだろうか……

「この一年間、羽鳥の気迫凄かったもんなあ……」

「担任も、三年になった途端に勉強熱心になったお前見て、目ん玉落ちそうなほど驚いてたっけ」

「運が良かっただけだろ。俺、これから先どうしよう」

二人は懐かしそうに物思いに耽っているが、羽鳥にとってはこの先のことが不安でたまらない。本当は「幸運」ではなく「悪運」が羽鳥に付きまといているのかもしれない。

落ちこぼれなのが虚しくてたまらない。環と光太郎は中学校でもずば抜けて成績の良かった二人だ。このクラスでも成績は上の方だろう。

「勉強なら俺たちが教えてやるって！ それにあんなに頑張ってたじゃねえか。きつとこれからも頑張れるって！」

羽鳥の背中を力いっぱい叩く環に同意して、光太郎も頷いた。

中学の同級生たちは、急に勉強熱心になった羽鳥をからかうものや、成績の悪い羽鳥のことを「三日坊主で終わる」「努力しても無駄」と嘲るものまでいた。

だが環と光太郎は違った。

羽鳥が分からないところを質問すれば熱心に応え、自習の時間は三人集まって勉強し、予定が合えば家に集まって勉強会をした。

こんなに親身になってくれた親友二人には感謝してもしきれない。「ありがとう……」

「泣き虫だなあ、羽鳥は」

苦笑して光太郎が羽鳥の真黒な頭を撫でた。

感受性が強いせいか、再び眼が潤んできた。

映画館だろうが、喫茶店だろうが、公の場においても何かあるたびに声が震えてしまう。だからと言って、精神や、肉体が弱いというわけでもない。

この一年の努力を続けられたタフさや、学校で一番と言われた運動神経の持ち主だ。

本人は知らないが、羽鳥の涙もろい性格は容姿と相反して親近感が湧く。周囲のだいたいの人間は、この性格は羽鳥のチャームポイントと見ていた。

羽鳥の容姿——身長はすでに伸び悩んでいるが、それ以外の部分はその辺にいるモデルよりも整っている。

中学校では、王様は環、女王は光太郎、王子は羽鳥と呼ばれていくらい人気者で、密かに思う人間は男女問わずかなりいた。

すらりと伸びた長い手足、ピアニストのように長い指、襟足にかかるベルベツドのような艶やかな髪。きりっとした切れ長の目、大きめの黒い瞳。運動神経がいたため、適度に筋肉もついている。

典型的な日本人らしく堀は深くないが、日本人形のように整っている。

どれを取っても非凡で、老若男女問わず、振り返って感嘆の息を吐くほどだ。

共学だった中学校では、ひと月に一回は女子に告白されていた。

だが羽鳥はいつも断っていた。「きみには何も感じないから」が常套句で、常に何かしらときめきというものを探していた。

「そんなものを感じる時にはすでに爺さんだ」

「付き合ってみれば意外と何か感じるかもしれない」

というのが親友二人によく言われる言葉だ。「好きも嫌いも何も感じない人と付き合うのは失礼だ」と羽鳥は思っており、二人の言葉は参考にもされない。

運命の人など信じているわけではないが、羽鳥は特別だと思う人物が極端に少ないのだ。

家族は「特別」の中に入るのは当たり前だが、あとはこの親友二人しかない。他の友人と不仲だったわけではないが、ある程度話せればそれでいいとしか思っていないのだ。

このような人間では、血も涙もない冷血漢のように思われそうだが、感受性の強い性格を見れば分かるように、そんなことはない。事件や事故は一般人と変わらない程度の興味はある。毎朝の占いも人並みに気になる。ペットだった先代の柴犬が死んだときは一人でこっそり泣いた。

平凡な生活を送り、山も谷も感じにくい日常。羽鳥はその感じ方が極端なほど振れ幅が少なく、平坦なのだ。

どこか「特別」に淡い期待を寄せ、そうして普通ではない「努力」で手に入れた高校生活。

これからの生活が楽しみで仕方がない。

今日がその楽しみな日々へと続く門出。あまり期待しすぎてバカを見るかもしれないが、それでもいいと思えるくらい胸が膨らむ。

——そして、気になることが一つ。

周囲に気を配らない羽鳥が、この高校へ来て初めて興味を持ったもの。それが合格発表の日に見かけた女子生徒。

女子なのだからこの高校にいるなんてことはないだろうが、ずっと気になっていた。もしかすると、この高校に肉親がいるのかもしれない。

羽鳥が初めて女性に興味を持った存在。彼女が、「特別」の候補かもしれない。

どういふことだと羽鳥が呆けてしまっても仕方のないことだろう。目の前に立つ担任の教師は見たことのあるものだ。

スーツを着て白衣を羽織って立っている。

淡い色をまとったやわらかな印象を受けるかわいらしい小動物のような容姿。身長はそれなりにあり、一見しただけでは少女と勘違いしそうな可憐な容貌。

高校入試の合格発表のときに見た少女と同じ顔だった。

もしかたら、肉親なのかもしれない。だが、あの娘は少女で、この教師は男。似ているといっても別人なのだから顔の違いも出てくるはずだ。

入学式が始まる前のホームルームで担任の教師との初顔合わせだった。教師なのだから成人しているのだろうが、とても見えない。

男とは思えない愛らしい顔は生徒たちを釘づけにする。

丸味がかった四角い眼鏡を身につけ、少女よりもかなり印象が冷たく、厳しい目で生徒たちを凝視していた。

あの娘と同一人物とは思えないが、本人だ。否定したいのは山々なのだが、どこに違う要素があるのか見つからない。必死に頭から足まで穴が空くほど見つめるが、見つからない。

クラスの男子どもは何を思ったのか、好奇心に満ちたにやけた顔をしている。が、男が口を開くと皆固まった。

「天野玲、担当は化学だ。てめえら、運がよかったな。この俺が担当になったからには甘えは許さねえからな」

声まで同じだった。初めて耳にしたときはハスキーボイスだとし

か思わなかったが、男だというのなら納得できる。

美少女のような外見と反して、恐ろしく口が悪い。

衝撃が大きくて足元の床が崩れていくような気分だ。自分の感じた「特別」はなんだったのだろうか。

ひとりで青くなっていると天野と視線が絡んだ。次の瞬間、美少女顔の担任は左頬を微かに歪め、地獄の閻魔様もびっくりの凶悪な頬笑みを返した。

今日から「謎の美少女」は「地獄の教師」に決定だ。

あっという間に式が終わってしまった。注目の的の麗しき生徒会長様の言葉など耳に入っていなかった。

素晴らしい歓迎の言葉だったと友人は後に語ったのだが、ひとりだけ式の内容が左耳から入って、右耳から抜けていた。

今日の行事は終わった。明日は教科書販売らしい。

突然の再会に喜びではなく、恐怖を感じ、一日中衝撃から立ち直れなかった。帰り際、環と光太郎の心配の声も聞こえてはいなかった。

この衝撃をなんと伝えればいいのか分からなかった。もしかしたら、恋の到来かとすら感じた運命の出会いだと思っていたのに…。

ひとり、気持ちの整理をするために親友たちと別れ、深く考えずに適当に歩いていると屋上に出た。

この高校には、なぜかやたらと桜が植えてある。屋上から見ると地上は淡い桃色の絨毯に覆われているかのようだ。

しばらくフェンスに手を置いて新入生が学校から出て行くのを見ていたが、そのうち飽きてしまった。

今日は入学式なのだから、先輩連中が新入生を部活に勧誘する様

子が見れるのかと思っていたのだが、予想外に何もなかった。

担任の話によると、部活に関しては別の日にアピールする場が設けられているそうで、本日は入学式に集中できるようになっていたらしい。

よく晴れた午後。温かい春の優しい日差しを眺め、いつの間にか腕枕をして寝転がっていた。

太陽ばかり見ていて目がちかちかし出した。そっとまぶたを閉じると幾分か光が和らげられ、太陽のぬくもりが眠りを誘い始める。眠いわけではないのだが、このまま惰眠をむさぼるのも悪くないかもしれない。

まぶた越しの太陽の光が、ふと途絶えた。

「こんなところで、なーにしてるのかな？」

突然降ってきた声に反射的に眼を開き、びくりと身体を震わせた。まだ聞き慣れない人物の声がただけならこれほど驚かなかった。声の調子がまるで違って気持ち悪さで全身の毛という毛が総毛立った。

男は先程とは打って変わってやわらかい目をして覗き込んでいた。

「暖かくなつたとはいえ、外で寝ちゃうと風邪引くよ」

上半身を起こして腕をさすっていると、ほら、鳥肌が立ってるでしょ、と言われた。この鳥肌は別の意味なのだが…。

顔からやさしい微笑みを絶やさない。教室にとまたく違う様子に驚くしかない。別人かと疑っても仕方がないだろう。

冷たい印象など毛の先ほども感じさせない美少女顔をまじまじと見ていると、天野が頬を薄っすらと赤く染めた。ますます鳥肌が立ったとしても無理はない。

「――天野センセ？」

ぼそつと呟くと天野が満面の笑みで興奮したようにますます頬を紅潮させた。

「うあ――っ！ 君が僕のことを先生だなんて呼んでくれるなんて…！！ そのかわいい唇が僕の名前を象る！ 先生、嬉しすぎて

死んじやいそう!!」

——…この教師は今何を言ったのだろうか。かわいい顔が恍惚とした表情を浮かべている。

嬉しげに弧を描く眼を見ると、冷たい水を背中に浴びせかけられたかのような衝撃を感じた。危険という名の衝撃だ。このままここにいたら危ない。

咄嗟に本能で感じ取り、急いで立ち上がって天野の視線から逃れるように駆け足で逃げた。

視線は尚も追ってくる。

「やっぱり、はーちゃんはかっこいいなあ……。合格発表の日に見かけたときも見惚れちゃったけど、想像の中よりも本物を見るのが一番いいよね」

——想像ってなんだ。

突っ込みたいのは山々なのだが、関わり合いにならない方がいいと屋上の扉を閉めて一段飛ばしで階段を降りた。

「天野玲」

担任の俺様マッドサイエンティスト……ではなく、ただの変態。

と、書き換えた方がいいかもしれない。

昼休憩が終わる頃――。

羽鳥の苗字は「赤須川」だ。出席番号一番、一番右の一番前の席。そして、羽鳥にとっては一番嫌な順番。

すでに完食した弁当箱の包みを三つ並べて談笑する環と光太郎、羽鳥。

昼休憩は他の休憩に比べて少し長いので、弁当を食べながらであったり、食べた後だったり、ふたりが羽鳥に勉強を教えているため、自然と羽鳥の席に集まることになる。

本日も、先程の授業内容の復習をしていた。

ノートと教科書にかじりついている羽鳥の頭上からずっと何かを叩く音がした。

「よう、赤須川」

羽鳥が出席番号一番を嫌う原因がやってきた。次の授業は化学。そろそろ休憩時間も終わりだ。授業のために天野がやってきたのだ。顔を上げると、左手に持っている出席簿で肩をとんとんと叩いていた。

入学してから四日目。四時間目の授業。化学は入学してから初めてだ。

なぜ出席番号が嫌かというところ……。天野と視線が合う回数が多かったり、よく頭をぐしゃぐしゃにかき混ぜられたり、ホームルームの時間ではよく話を振られる。天野は右利きであるため、チョークを持つ右手が黒板近い右側にいるということもあるうえに、生徒たちの板書のとくに避ける位置も右側にいることが多い。自然と近くにいます。

最悪だ。

「……前々から思ってたけど、羽鳥、いったい天野に何したんだ？」

環の言葉に、天野が顎を逸らして環の頭を出席簿で叩いた。しかも角で。ごんという音がして環は両手で頭のとっぺんを抑えた。角は結構尖っているうえ、固い。相当痛そうだ。

「天野せ・ん・せ・い、と呼べ」

ふたりの様子を見ていた光太郎は軽く息を吐き出した。そうしてちらりと羽鳥に視線を移して、再び天野を見た。

どういう意味の視線だったのか分からないが、複雑な色が混ざっていたのは確かだ。

「天野先生って、凶暴だよな」

「ふん、俺様がかわいいからって襲うよ。実験台にしてやるからな」本人を目の前にして凶暴だなんていう光太郎は胆が据わっているのか、何も考えていないのかよく分からない。

光太郎は天野とは違う意味で人気者だ。「美貌の学年首位」。それが光太郎の二つ名みたいになっている。

入学式が終わった後、それぞれのクラスでホームルームの時間中に学年首位のみ名が挙げられた。光太郎が一番だった。新入生代表である光太郎を見ていたので分かってはいたが、改めて聞いてみると、やはり光太郎の明晰な頭脳には感心してしまう。

天野はかわいいが、性格に難有りとして見られているようだ。だが、それでもお近づきになりたいと考える、バカで、身の程知らずな男子生徒もいる。

あの冷たい瞳で睨まれたい、などというマゾつけたっぷりな男には大人気だ。他には、あの強気な瞳が欲望で濡れるところが見たいなどというつわものもいる。

この高校は男子校なのだが、周囲に女子がいないためか中性的な面立ちのものや、華奢な学生、顔が整っているものなど、人気らしい。羽鳥にはまったく理解できないが。

「羽鳥も、とんだものに気に入られたね…」

再び複雑そうな瞳で羽鳥を見、肩を叩かれた。理由が分からずきょんとしていると、今度は天野がこちらを凝視している。

常に冷たい色の目だが、何だかいつもよりややきつめな印象がある。

羽鳥はこれまでの経緯で、天野と目が合うときはからかうような含みを持たせることが多いことに気づいていた。

機嫌が悪いのだとようやく気付くが、その理由が思いつかない。分からず首を捻っていると天野に出席簿でばこんと叩かれた。環のように角ではなく、平らにした状態で。

「おい、赤須川」

「なんですか、天野センス」

呼び捨てにしたいが、したくて堪らないほど、この教師の変態ぶりは寒気がする。あの、屋上での出来事を忘れたわけではない。今のところあんな様子はあれ以来見ていないのだが。

「放課後、課題集めて化学準備室へ来い」

そう言っただけで離れて行く天野と再び視線が合う。今度は一瞬で見間違いかとも思ったのだが、天野の目がふわりと甘く、やさしいものになった。機嫌が直ったのかと思ったが、放課後に呼び出された。やはり機嫌が悪いのだろうか。

「……………羽鳥、ご愁傷様…」

環の言葉に、光太郎も肩を竦めた。

このふたりはおそらく気付いていない。天野が時折見せる別の表情。屋上で見せたやさしい眼差し。

どうしてそんなふうに二重人格のようなのかは分からないが、あのやわらかな印象の天野を知るのは、羽鳥だけのようだ。

柔和な視線は羽鳥のことを追っているようだが、悪意はない。それどころか、どこか憧憬の念を込めている気がする。

自分の何が、天野の興味を引くのか分からないのだが、あの俺様マッドサイエンティストの教師の別の顔を知っているものが、自分だけというのは、認めたくはないが悪くはないものだ。

間もなく予鈴が鳴り、羽鳥の自分の思考を中断した。

そうこうしている内に、放課後になった。

集めたノートを持って化学準備室に来たのはいいのだが、どうやって中に入るか悩むことになった。

両手で持っているノートだけではなく、帰り支度を済ませて鞆も持っている。片手を離すとノートが雪崩を起こしそうだ。

中にいるはずの天野を呼ぼうとしたが、よく考えればふたりきりだ。

放課後に持って来いと言われたノートは、羽鳥が図書室にいる間教室に放置だった。持って来いと言われたが、放課後というだけで時間は指定されていない。

などと屁理屈をこねて天野と会うのを後に、後に、さらに後にしたのだが、図書室で本の山を見てそんな思考など吹き飛んだ。

広い図書室は、進学校であり、私立であり、本棚がこれでもかと並んでいた。ぎっしり詰まっており、本の虫の羽鳥にとっては宝の山だった。

夢中になって図書室で本を眺めていると――五時半になっていた…。

環と光太郎は、部活を見学することとで、放課後は別れてひとりだった。この時間では、他の教師はおそらく顧問をしている部活に行っているのではないだろうか。

確か、天野は顧問する部活はなかったような記憶がある。

――ふたりきり。どうしても先日の屋上のが気になる。また変態化しておかしな発言をするのではないだろうか。

不安に駆られて声をかけるか迷っていると、突然引き戸が動いた。ひとり悶々と考えていたため、戸のガラスに人影が映ったことに気付かなかった。

「やあ、約束通り持ってきてくれたんだね」

約束などした記憶がない。天野に一方的に命令されたのだ。そんなことを言って天野の機嫌を損ねようものなら、絶対零度の如く冷たい視線が送られそうだ。

視線を合わせるのが恐ろしく、天野の胸付近を見ていたのだが、声の調子が教室でのものと違うことに気付く。入学式から四日間、ずっと冷酷そうな冷たい目と、鋭い声しか聞いていなかった。

声の意味はなんだろうと顔を上げると、にこやかに微笑んでいた。目もやわらかく弧を描き、小さな薔薇色の唇は白い歯をこぼしている。

「どうしたの、そんなに僕のこと気になる？」

首を傾げて困ったふうに笑む。

一人称までもが違うことに気付いた。教室では「俺様」か「俺」を使っていたはずだ。どこまでも傲慢で、自分勝手な男。今この場にいる天野からはそんな雰囲気などまったくくない。こちらのことを気遣う天野など、常日頃の男とは百八十度違う。

「驚いてるね、はーちゃん」

「……は、はーちゃん……？」

確か、入学式のときも、そう呼ばれた気がする。何とも馴れ馴れしい呼び方だ。入学式の日は焦りと、驚きと、天野の二重人格に恐怖——襲われると思ったのだ——で気付かなかった。

「下の名前が羽鳥だから、はーちゃん。かわいいでしょ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3071ba/>

桜から繋がる奇跡へ

2012年1月8日03時10分発行